㈳ 日本建築材料協会　機関誌『けんざい』203 号掲載
（2005 年 11 月 20 日）
SPIRIT

災害現場に学ぶこと

大阪ガスエネルギー・文化研究所　客員研究員
弘本由香里

水害の教訓はどこに

震災・水害と、毎年のように大きな災害が日本のどこかで発生している。

1995 年の阪神・淡路大震災は、住宅の耐震性を高める技術開発や地域防災の必要性を顕在化させる大きな引き金となった。建材業界でも、さまざまな取り組みが生まれたのではないだろうか。一方で、近年相次いでいる、台風や集中豪雨による大規模な浸水被害等は、どんな教訓を残し、その教訓はどんなふうに活かされようとしているのだろうか。

私的な話を持ち出して恐縮ではあるが、実は今年 9 月の台風 14 号で実家（山口県岩国市）が床上約 1 メートルの浸水被害を受けた。木造の名橋「錦帯橋」の橋脚の一部が流されたことや、高速道路の一部が崩落し犠牲者を出したことは全国規模で報道されたが、台風の被害はそれだけに止まらず錦川流域の約 2 千世帯が浸水している。その後、私自身、災害復旧のためにたびたび実家に帰り、いまだに作業を続けているところである。

戦後、上流に複数のダムが築かれて以降、今回ほど大規模な水害は起きていなかった。被害の背景には、予想を超えるほどの集中的な豪雨とともに、かつて雨を蓄えてきた田畑の多くが宅地化され、山林も荒れ、土地が急速に保水力を失っている影響も作用しているのかもしれない。地方都市や農村部が開発され、水害の記憶や防災の知恵が途絶えようとしている刹那に、今回の水害は襲ってきたように思えてならない。

兎にも角にも、水害からの住宅の復旧は、生まれて初めての経験となった。その経験の中で、最も気になったことの一つが、「建材」の質である。

住宅復旧と建材の質

住宅の復旧には、まず、外壁と内壁の間に詰められたグラスウールの断熱材を全て抜き取り、内壁にたくさんの穴を開けて通気を確保し、家が自然に乾燥していくのを 1 ヶ月以上かけて待つこととなる。この間、内壁の合板が乾燥していく際に、合板に用いられた接着剤等の科学物質が揮発するのか、きつい薬剤臭が発生し続ける。1 ヶ月余を経て、合板や石膏ボードの含水率がほぼ通常レベルに下がったことを確認したうえで、新しい断熱材を詰め、内壁や床や建具や各種設備を修復していくことになる。

我が家の場合、安普請のせいだろうか、化粧仕上げされた合板性のドアなどの建具は、みな一様に変形し、新しい建具に取り替えるしかなかった。家具も、安ものの合板製品はみな使いものにならず、廃棄処分となった。一方、仏壇やピアノなど、しっかりとした素材を使って丹念につくられたものは、応急処置を施した後に多少の補修をすれば、十分に使い続けられることがわかった。浸水直後の惨憺たるピアノの様子を見たときには、捨てざるを得ないかとあきらめていたところ、見事に復元できたのは、望外の喜びでもあった。

一枚板でつくった家具や、しっかりと漆を施した品々の強さやしなやかさを改めて思い知らされた。といって、合板性の建具や家具が全滅というわけではない。それなりに建材

の質を吟味して調達していた家では、浸水後の歪も最低限に止まり、廃棄せず使い続けることが可能なケースもあった。水害に接した生活者の一人として、私は、建材のつくり手が暮らしの楽しみやリスクに照らしながら建材の質に関する情報を、暮らしの楽しみやリスクに照らしながら生活者と共有していくことの大切さを訴えたい。

こうした災害現場の細部に、これからの人々の生活を支える建材のありようを見出すことこそ、未来の社会に向けて責任を負うべき企業や業界の重要事ではないだろうか。ぜひとも、建材メーカーの方々には、災害現場を歩き、復旧途上の生活に触れ、廃棄物処理場を訪ね、大量に廃棄処分された家具や建具の山を調べ、そこから得た教訓を商品へ、そして生活者とのコミュニケーションへと活かしてほしい。■